

銃後史

ノート

復刊3号 | 通巻6号 |
いま
女たちの現在を問う会

特集・「紀元二千六百年」の女たち



刊行にあたつて

いま 女たちの現在を問う会

銃後史ノート

「銃後史ノート」……主として戦後育ちの私たちが、したがつてほとんど「戦争」を知らない私たちが、私たちのささやかな機関誌にこんなタイトルを選んだのは、私たちなりの「戦後」があり、その帰結としての「現在」があるからです。「銃後」ということばは、主に十五年戦争の過程で頻繁に使われ、女たちに「銃後の護り」を強要しました。しかし、十五年戦争が明治以来の日本の「近代」の集約の姿である以上、それは十五年戦争の時期に限らず、日本「近代」を通して女たちにつきまとつことばであると考えます。

私たちは母や祖母たちから、かつての戦争で、犠牲を強いられた被害体験の話を聞かされて育ちました。しかし、成長の過程でその戦争が侵略戦争であったことを知り、戸惑いを持ちつづけてきました。現在も、「銃後」ということばは消滅しても、体制を支える女の情況はかわっていません。この戸惑いと認識の中から、私たちのグループは生まれました。

母たちは確かに戦争の被害者であった。しかし同時に侵略戦争を支える「銃後」の女たちでもあった——何故にそうであり得なかつたのか——この機関誌を通じて、これを明らかにしたい、と思います。そして、それは単に過去の「銃後」の女たちを考えるだけでなく、すでにかつての母たちの年代に達した私たち自身の状況を明らかにするものでありたい、と考えています。

- 生き残った「銃後」の女たちと、生き残った銃後の女たちから育つ私たちの対話の場として、
- 「銃後」の女たちになるかもしれない私たち、すでに形をかえてなつてているかもしれない私たちを、かつての「銃後の女たち」をみるとことによって対象化するために、
- 他者、あるいは他国の人々を踏みつけにしない私たちの解放の方向をさぐるために、

このささやかな機関誌をあらしめたいと願っています。

一九七七年十一月一日

特集●「紀元二千六百年」の女たち

年表 4
座談会 5

「紀元二千六百年」の女たち

束の間の小春田和
我関せず焉
京城の女学生

女たちの耻辱

エッセイ

その頃わたしは
聞き手／小園・むらき・鈴木・三上・中沢・加藤
(構成・中沢利恵子) 36

牧瀬菊枝
大久保久栄
長田かな子 34 32 30

「紀元二千六百年」

まつりと女

大政翼賛会と婦人団体
婦人運動家の動向2

大畠みゆき 65
むらき数子 45

二千六百年の「思い出」
リズムに乗つて戦争へ

寿岳章子 74
三上由紀子 76

台所と國家

統制経済強化が女たちにもたらしたもの

加納実紀代 83

産めよ命てよ國のため

鈴木スル子 102

女性の短歌にみる「紀元一千六百年」

椿 芳子 116

戦時下のキリスト者たち

明石静枝・畠田好枝を中心として

奥田暁子 122

『桜の国』成立前後

大田洋子

長谷川啓 137

大田洋子の『桜の国』と私

椿 芳子 148

プロパガンダとしての映画

ナチスドイツ映画と日本の映画統制

佐藤文子 154

「紀元一千六百年」と教育改革

小園優子 164

紀元一千六百年と私・そして私の家族

宇佐見サエ子 177

わたしのかの子覚え書・いのち咲きみちて

森 鏡子 187

今日的状況をつぶす

郡山吉江 202

かみ

健民政策のかけで.....64
流行.....82

〔宝塚も戦時色〕
女優交換.....153
中絶.....73

ベストセラーの女たち——『小島の春』と『女教師の記録』.....186

集会のお知らせ.....206

「紀元二千六百年」

——まつりと女——

むらき數子

「紀元二千六百年」とは何だったのか、それは子どもにとつて何だったのか、は既に山中恒著『ボクラ少国民』（辺境社一九七四）に詳しく述べられている。

ここでは、「紀元二千六百年」を体験していない一人として、その記念行事・事業を中心に、国家あげてのまつりとはどんなものだったのかを追い、そうしたまつりと女との関わりを探つてみたい。

一、「紀元二千六百年」のまつり

一九四〇（昭和一五）年を「紀元二千六百年」として祝ったのは、結果から見れば、泥沼化する長期戦に厭気がさし、弛緩してきた銃後を、翌年の日米開戦に向けて奮い立たせる「戦陣の祭」と位置づけられる。だが、貴族院本会議で「輝く皇紀二千六百年を迎へるについて」と阪谷芳郎男爵が質問を行つたの

は一九三二年、五・一五事件後の斎藤内閣が満州国承認へ向かっている時であった。

以後、一九三六年、二・二六事件後の戒厳令下に、「紀元二千六百年祝典事務局」が内閣に設置され、翌三七年、七月七日に「紀元二千六百年奉祝会」が祝典事務局と同じ屋根の下に設けられた。

記紀を史実とする皇國史觀により、神武天皇が即位した年から二千六百年目が、明治五（一八七二）年になつてから制定された「紀元」で逆算すると、昭和一五（一九四〇）年に当たるとする、虚構の数字を掲げて、まつりが準備されていった。

三九年未、新聞に「二千六百年」関連の記事が急増する中で政府は次の四項からなる「紀元二千六百年祝典実施予定要項」を発表する。

一、祭典

宮中、各神社で紀元節祭を特に鄭重に執行する。十一月十日臨時祭典。

二、式典

昭和天皇即位の日である十一月十日に宮城外苑で政府主催。

三、大觀兵式、大觀艦式

四、奉祝会

式典後、全国民が天皇に祝詞を言上する行事、紀元二千六百年奉祝会主催。地方、外地では式典当日奉祝式。

一九三九年は、奉祝国民歌「紀元二千六百年（金鷗輝く日本）」の……の鳴り響く中に暮れた。紀元二千六百年奉祝会・日本放送協会によって懸賞募集されたこの曲は発表されるとすぐ

にレコード各社によって競作発売され、ラジオの国民歌謡の時間に流され始めた。頌歌・童謡・序曲など何種類も作られた奉祝のメロディーも同様である。

一九四〇年の元旦は、国民精神総動員中央聯盟の左のような呼びかけで迎えられた。各学校・宗派へも文部次官から同じ注意が通牒された。

一、松飾りその他新年恒例の諸事万端は時局柄簡素にすること。

二、虚礼的の年賀状及年始贈答の類は一切之を廃止すること。

三、屠蘇を祝ふことは我国古来の慣行であつて、単なる飲酒とは趣を異にするを以て敢て之を禁止するの要はないが、

屠蘇に名を藉りて飲酒の傾向を助長する結果にならぬ様留意すること。

そして、各家庭での神社参拝、午前九時のラジオの「国民奉祝の時間」に宮城遥拝・万歳奉唱、各団体・企業・学校での奉拝式または祝賀式では國家齊唱と「紀元二千六百年頌歌」齊唱を行ふ。この日のラジオは、

六時 伊勢大神宮内宮神楽殿より国運隆昌武運長久祈願を中継

七時 君が代

初鶯

九時 国民奉祝の時間「君が代」、宮城遥拝、「一月一日」「紀元二千六百年頌歌」、阿部首相講演「紀元二千六百年を迎へて」、万歳三唱

新聞紙面も、首相の年頭の辞から、斎藤茂吉の「皇紀二千六百年」などの文芸作品や写真、企業の記念事業計画まで、二千六百年奉祝で埋めつくされる。

電力節減でネオンサインも消え、木炭不足で寒く暗い「輝く年」の東京の街頭を、永井荷風は次のように描く。

道すがら電車の窓より新年の町を見るに、松屋松坂屋高島屋

白木屋など各百貨店の硝子窓には、いづれも申合せし如く金屏風の前に日月の錦旗を立て、神代風俗の人形鎧武者などを飾りたるさま、どうやら祭の花車人形を取りおろして並べたるが如し。道の角々にはお米を大切にしませう、又家ごとに神様をまつりませうなど大書せし立札を出したり。（『断腸亭日乘』'40・1・4）

東京の六百貨店では「紀元二千六百年奉祝会」主催の展覧会が三週間にわたって開かれ、市電・地下鉄は「展覧会巡観乗車券」を発売する。

二月から秋までの財團法人日本文化中央聯盟主催の芸能祭は宝塚の「すめらみくに」などで幕をあける。

正月の初詣に続く次のヤマ場は二月十一日の紀元節である。

内閣情報部は、各種行事は十一月に行うとして、「紀元二千六百年祝典」詔書をうけ元旦とほぼ同様の遙拜、式典を指示した。

金鷫勲章五十周年でもある紀元節を、東京では府と建国祭本部の共催で「紀元節奉祝皇威宣揚祈願」の式典と「建国の夕」を挙行、靖国神社を中心会場に、奉祝行進、学生三万人の武装行進や児童武道大会、「陸海空に世紀の饗宴」をくりひろげ、動員三〇万人、参加団体は四二九団体にのぼる。街には立看板を掲げ、パンフレットを学校、銀行、商店、会社、工場に配布

する。

新聞、ラジオの奉祝特集は一週間にわたり、十三市の昇格や

恩赦の発表などの記念行事もこの紀元節に集中する。

外地でも、上海の奉祝旗行列や南京駐屯部隊の遙拜式など、四〇万人が在留する中国をはじめ、日本人のいるところ至る所で奉祝行事がくりひろげられる。

三月には、六日の地久節（皇后誕生日）と十日の陸軍記念日を中心いて、模擬市街戦など軍事色濃い催しが行われる。

愛國婦人会東京府市聯合分会は「奉祝紀元二千六百年地久節婦人報國祭」に五万人を動員し、日比谷から靖国まで行進する。大日本聯合婦人会は権原で全国大会を開く。奉祝の新聞広告は十日を過ぎるとめっきり減る。

四月三日は神武天皇祭であるが、皇族が喪中で参拝しないこともあり、紀元節のような盛り上りはない。この月は全国で記念植樹が行われ、国防婦人会も十日の創立七周年記念日に権原で大会を開き、梅の木（梅干になる）を植えている。

五月にはドイツのゴータ大公が来日、上野で開催の日本文化史展に皇族から小学生までが見物に行く。海軍記念日、全国青少年学徒の勅語奉読式、男女青年団大会、体操大会とこの月以後青少年はひつきりなしに屋外へ動員される。

六月は天皇の関西行幸、満州國皇帝の来日があり、東亞大会、

天覲武道大会が七、八月へかけてのスポーツ大会の季節を開く。七月には映画コンクールの一等が「歴史」（日活、内田吐夢監督）に決定。

八月、九月は奉祝行事もいささか低調となる。朝鮮では施政三十周年記念を兼ねて「朝鮮大博覧会」が京城日報によって主催される。満州國では建国忠靈廟が鎮座する。

十月は、明治神宮国民体育大会、上野での奉祝美術展、十一日の横浜沖の「観艦式」、一二日代々木での「観兵式」と、ページェントがくりひろげられる。

十一月、「海外同胞東京大会」に一、五〇〇名が世界二三二カ国から集つたのを始め、各種の大会が開かれ、祝典列席者五五〇〇名も府県別の特別列車で集中するので宿屋は満員、警視庁は一時的に取締りを緩和。「さあ、お祝だ、お祭だ、浮かれ騒ぎでない程度なら」と、禁じられてきた午前興行、昼酒が許される。花電車、提灯、アーチ、踊り舞台と、東京は戦時下の暗い沈黙を久しぶりに破った。

「祝へ、元気に朗かに」と大政翼賛会のポスターに励まされ

て、十一月十日宮城外苑に天皇皇后を迎えての式典、十一日は同じく奉祝会を中心に、五日間にわたる奉祝の間、警視庁への届出だけで宮城前への旗行列、提灯行列、団体行進は六万人、区内だけのもので二二万人、神輿太鼓は延三、一四七基にのぼり、

個人の奉祝者は調査不能、人口六六〇万人の東京市内に殺到した人々は式典当日の十日だけで二五〇万人にのぼり、未曾有の人出を記録した。

にもかかわらず、神輿渡御について歩いた知恵遅れの女性の背で幼女が死んだ事件と、強盗が一件しか事故はなく、「許された祝酒に酔った学生、青年の姿」はあっても、悪戯、喧嘩で検束されたものは皆無だと新聞は伝える。

永井荷風の觀察によれば（『断腸亭日乗』一九四〇年）、

十一月初七。……自肃々々といひて余り窮屈にせずともよしと軍部より内々のお許ありしと云ふ。されど一説にはこの御許しは年末にかけて窮民の暴動を起さんことを恐れしが為めにて、来春に至らば政府の専横いよく甚しくなるべし。：

十一月初八。浅草公園に至る。帰途街上に再び醉漢の多きを見る。田原町地下鉄入口にて格闘するものあり。車中にて大声に口論するものあり。虎之門にてカフェー帰りとおぼしき者の醉ひて争へるあり。……

十一月九日。銀座通の人出おびただしきこと西の市の比にあらず。

十一月十日日曜日。……私娼一人居合せ赤飯をくらへり。

今日は紀元二千六百年の祭礼にて市中の料理屋カフェーにて

も規則に依らず朝より酒を売るとの事なれば待合茶屋また連込旅館なども臨検のおそれなかるべしと語り合ひ、やがて連れていざこにか出で去りぬ。……

十一月十一日。……（銀座）表通は花電車を見むとする群衆雜還し、尾張町四辻辺殆歩むこと能はず。裏通に出るに乱酔せる学生隊をなして横行し、数人づつ相抱いて放歌し乱舞するさま醜陋見るに堪えず。南鍋町四角の辻最甚し。……

十一月十二日。恰花電車數輛銀座通を過るに会ふ。街上的群衆歎呼狂するが如し。……（浅草の）踊子の中にはいまだ一度も花電車を見たることなしと言ふものもあり。これによりて回顧するに花電車は昭和十一年の秋が最後にて其後は無かりしが如し。地下鉄の階段また車内に泥醉者の嘔吐せしもの其儘仕末をなさずに打捨られたり。……

東京近郊の町の中学校四年生は「この奉祝祭には建設的な色彩も元氣も朗かさも感じられなかつた。各町には前世紀の遺物の如き山車が氾濫しこれを見物する群衆で交通は杜絶し……」と、神社参拝そつちのけで山車見物に大いに遊び暮そうとするお祭り気分の人達を批判している。（東京朝日新聞40・11・

19 「祝ひ終つて 巷の声」）

十五日の朝刊には「街に新たな息吹き」との見出しのもと「祝

ひ終つた さあ働かう／ 大政翼賛会」の立看板の写真に、「国民進軍の世紀を寿ぐ『歓喜の大休止』はこの日で終つたのだ」と掲げる。この日を境に、紙面は奉祝から新体制翼賛へと塗りかえられる。宮崎神宮の「八紘の基柱」竣工などの残余の奉祝行事の記事も、地味な扱いとなり、奉祝広告は見当らなくなる。

以上のように述べてみると、読者はこの一年中、全国でのべつまくなしに奉祝行事に明け暮れていたという印象を抱かれたかも知れない。

実際には、本特集の別稿にも見られるように、かなりの地域差があつたようである。また土地によって、一年の内で最も盛大に「二千六百年」を奉祝した日は異なる。たとえば、小田原では市制施行記念日である十二月二十日であり、長野県の谷あいの村にとっては、春四月の聖火リレーと遣骨迎えが重なった日だったかも知れない。個人にとってはその立場によってさらにはまちまちである。以下、奉祝のいろいろな側面を見てみよう。

まつりの仕掛け

国際的な事業として一九三六年の内に第十二回オリンピック東京大会を招致し、「紀元二千六百年記念日本万国博覧会」の開催を決定し、国際社会でのデモンストレーションにのり出し

たが、日中戦争と、第二次世界大戦の勃発、日独伊三国同盟締結の中で、オリンピックも万国博も中止に追いこまれ、東亜大會などの東亜の盟主としての地位のデモンストレーションに縮小していく。

満州國皇帝が軍艦「日向」に乗せられて慶祝訪日させられたのをはじめ、日独伊三国同盟締結に向かっているドイツからはヒトラー総統の親善使節ゴータ大公が来日し、フランス、ハンガリー、イタリア、ドイツから奉祝曲が寄せられ、スペインでは国立大学に「二千六百年史」が開講、ドイツで「二千六百年奉祝日本展」が巡回開催され、また東亜大都市聯盟大会が開かれるなど、「国際的」な奉祝行事があいついで報道される。

国内的には、まさに万世一系の国体を祝い、その国体の永続に協力する、山中恒の言う「国民的服従宣誓式」が一年間を通して、あらゆる場で、あらゆるメディアを通じてくりひろげられていく。

「皇紀二千六百年 之で行かう」という一九三九年十二月の東京朝日新聞のシリーズを見ると、横山大觀の作品献納や、佐木信綱ら文学者・芸術家・神官などの悠久二千六百年の歴史に感激して奉祝のお先棒をかつぐ発言に対し、奉祝会会长でもある近衛文麿の「お祝ひどころでは無い二千六百年が来るね

それは目出度い年だが決してお祭り騒ぎであつてはならぬ二千六百年だ」とか、宇垣一成の「二千五百九十九年の次は二千六年、至極当たりのことぢや、何の變つた事もない」といった醒めた発言があり、奉祝の真意が「聖戦完遂」＝事変処理のための精神総動員にあるという為政者のホンネをうかがわせている。

その中にあって、水野満寿子愛国婦人会長は、時局下に感謝の気持をもつてお祝いに記念植樹をするといい、武藤乃婦子国防婦人会長は、日本婦徳の涵養が一番大切、台所から決して悲鳴を上げまい、と述べる。いずれも銃後の母性の心得の再確認である。

こうして、厳粛な形式的な側面だけを強調し、まつりの他の側面であるお祭り騒ぎ＝浪費、放縱、無礼講を禁ずるという、いびつなまつりが展開されて行く。

伊勢神宮、畝傍山陵、檍原神宮参拝のための関西行幸(六月)をはじめ、この年、天皇は数多く諸所へ行幸して国民の前に姿を見せ、多くの皇族が頻繁に各種の催しに現れ、「二千六百年」を期して結成される組織の総裁に就任する。宮妃から内親王に至る女性も多忙である。

秩父宮を総裁とし、副総裁に阿部首相、会長に病氣の徳川家達に代った近衛文麿を据えた紀元二千六百年奉祝会は、百万円

を下賜されて、

などが挙げられる。

一、橿原神宮境域畝傍山東北陵参道の拡張整備
二、宮崎神宮境域の拡張整備

三、神武天皇聖蹟の調査保存顕彰

四、御陵参拝道路の改良

五、国史館の建設

六、日本文化大観の編纂、出版

等を奉祝記念事業として計画している。

そして陸海軍省、文部、内務、厚生、宮内省と、それぞれがきもいりの団体が記念大会や展覧会を開き、県単位の奉祝会が中央の奉祝会の記念事業を小規模にした行事を行い、以下、市町村・部落に至るまでが上にならって「紀元二千六百年奉祝」と銘うった事業を計画する。恩赦も行われる。

府県レベルの事業は既に山中恒が整理したように（『ボクラ少国民』P.216）、

図書館、体育館、教育会館、修練場、など記念館の建設
造林、公園設置、運動場設置
神宮の境域整備
忠魂碑、聖蹟顕彰
郷土史などの編纂・刊行

「紀元二千六百年」——まつりと女——

県民歌募集

企画の中には、単に記念事業というカンヌリをつけただけ、

実質は自力更生運動の看板の塗りかえにすぎないものも多い。

たとえば、長野県諏訪郡町村長会が、天皇、皇后、御三家に真綿を献上という一方で、皇紀記念と、町制施行運動を展開

したり（この年全国で二〇の市が誕生して一七四市となる）、農業経営合理化に農地の交換分合に乗り出す村があり、村営産婆を設置する村がある。かと思えば、農繁期託児所に二千六百

年記念として宿舎二棟を新築しオルガンを購入する村もある。大政翼賛に向けて続々と結成される各種の職域・業種団体、あらゆる組織が奉祝大会を開く。

勢いづく神社界

二千六百年に、ひときわ目立つのは神社関係の動きである。神武天皇を祀る橿原神宮は、明治初年には全く貧弱な山陵にすぎなかつた。一八八九年に創建され次第に拡張されてきたが、

二千六百年を期して、奈良県主唱・朝日新聞社協賛の建国奉仕隊一二一万余名によって拡張整備され、運動場や橿原文庫など多くの附属施設も作られ、一躍、この「輝く年」のメッカとなつた。

初詣客は前年の二〇倍、三が日で一二五万人にはね上り、年

間を通じて、融和事業団、大日本聯合婦人会、銃後奉公祈誓大会、傷痍軍人大会、大日本青年団など既成・新設の各種の団体

の記念全国大会の会場となり、天皇の行幸をはじめ、聯合艦隊から部落会に至る団体、無数の個人の参拝が相次ぐ。東亞競技大会関西大会や各種武道大会が開催され、朝日新聞社主催、文部・厚生省後援の日本体操大会の中央会場にもなる。宮崎一権

原継走や帝國在郷軍人会の「御饌米奉獻リレー」の終点ともなり、ライオン歯磨による「学童書方奉獻」など、奉納が殺到する。また、奈良県教育会による厳櫛^{イシカシワ}の苗頒布や、信濃毎日新聞社主催「紀元二千六百年奉祝県下著名神社歴拝聖火リレー」や東京聯合少年団の大嘗火などへの聖火の起点ともなる。

「婦女界」など雑誌も、競って参拝記事や「聖地」の写真をのせる。

「建国の聖地」宮崎・権原両神宮の他の神社をめぐる動きも活発である。

各地で郷土の名誉を賭けて、地元の神社の昇格運動が展開され、そのための強制的な寄付割当や用地買収、勤労奉仕が相次ぐ。神社新設も多い。南洋神社などが外地に創建され、東郷神社の竣工、護国神社の創建・拡張など軍神は華やかである。

北米在住の兵役義務者会一万人による靖国神社への参拝・奉納・勧請も

盛んに行われている。

既に、自力更生運動で敬神崇祖が強調されて以来、神社では毎月一日の興亞奉公日や祭日に学校ごと職域ごとの参詣・式典が行われ、兵士の送迎、部落会や婦人会による輪番日参、少年会などの清掃奉仕が日常的に行われるなど、なじみ深い場になっている。

特に、農村では、村落共同体の生活に根づいた盆踊りや「お日待」「庚申講」などの娯楽的な信仰行事が抑圧される一方で神社参詣は奨励されている。運輸事情の悪化で修学旅行も制限されるほど一般の旅行が制約されるなかで、聖地巡礼とか武運長久祈願と名のる旅行は大目に見られている。神宮皇學館大学の設置もこの年である。

こうした祭政一致のムードのなかで、宗教各派は、教派神道からキリスト教、回教に至るまでさまざま「紀元二千六百年記念」事業を行い、奉祝大会を開き、本特集奥田論文に示されるように宗派としての存続の道を求めている。

この年十一月九日、内務省神社局は神祇院に昇格し、国家神道は絶頂期を現出するのである。

奉祝一色の教育・文化

同じ一九四〇年、文部省は十月三十日に天皇出席のもと「教

「育勅語済発五十周年記念式典」を挙行するが、各地の教育界も

勅語五十周年と紀元二千六百年を合わせて、大会や講演会、出

版、聖地巡拝旅行などの記念事業を行っている。帝国教育会では二千八百余名の教育功労者表彰を行ったが、東京府関係の五〇年以上在職者七八名の中には嘉悦孝ら七名の女性が含まれている。

全国小学校連合女教員大会第二〇回大会は六月に、宮城前で「光輝ある二千六百年を迎へ皇祖の鴻業を欽仰し奉り我等八万の全国小学校女教員は茲に愈々肇國精神を顕揚し皇国民の鍊成を期し以て育英の負荷に対へ天業を翼賛し奉らんことを誓ひ奉る」と宣誓した。

朝日新聞社は、海軍省、文部省の後援、海軍協会と共に「全国小学校教員聖地巡航海上訓練」を催し、四〇〇名の教員を練習船にのせて宮城・靖国・明治・熱田・伊勢・檍原の各神宮参拝と、横須賀での海軍施設見学、甲板洗いなどの実習をさせる。そして生徒達を学校の内外の多様な記念行事に動員した様子は、本特集小園論文に詳しい。

生徒を動員するだけでなく、女教員自身も東京市主催の奉祝会が明治神宮外苑競技場で開かれれば、五五〇名の集団体操、縄飛体操を演じている。

個人としても教員は武道大会に参加したり、新聞雑誌に投書

して奉祝を論じたり、多忙である。

学界も紀元二千六百年を疑う津田左右吉の『古事記及日本書紀の研究』などがこの年一月発禁、起訴されるなかで、『皇国史観に立つ平泉澄らが講演に出版に活躍、この年を期しての第二回文化勲章授与（西田幾多郎、川合玉堂、高木貞治、佐々木隆興）や、天皇の東大行幸など、学術報國に奮い立たされている。

出版界も大川周明『日本二千六百年史』や徳富蘇峰『満州建国読本』など多数の記念出版を行い、全国の出版業者から檍原文庫へ献本したり、雑誌は『日本評論』が三五〇頁の「別冊附録総合二千六百年史」をつけるなど特集記事を組む。『主婦の友』は八五錢の「二千六百年奉祝新年号」に建国双六、神武天皇御尊像を含む八大奉祝附録をつけ、『家の光』新年号も「神武天皇御東遷」という特別附録のほかに檍原神宮の写真や奉祝記事を並べる。

文芸・評論に名を知られる人の奉祝発言、作品発表は枚挙にいとまないが、女流だけを見ても、長谷川時雨の『輝く部隊』が陸海軍へ献納され、紀元二千六百年のお年玉として前線へ贈られる。

朝日新聞の連載「皇紀二千六百年日本女性史」は高群逸枝、

竹田菊、長谷川時雨、久布白落実、「紀元二千六百年」も高柳

光寿と高群が担当している。高群の著書「女性二千六百年史」

はタイムリーな出版として迎えられている。

女流歌人の奉祝ぶりは本特集椿論文にゆずろう。

そのほか、芸能界でも一年間を通じて芸能祭が行われ、歌舞

音曲、あらゆる分野の芸能が奉祝を演じる。美術界も政府の奉祝美術展覧会から個展に至る各種の奉祝展を開き、「日本文化史展覧会」からデパートのショーウィンドー、各地での小規模な博覧会まで、古代色を溢れさせる。

スポーツ界も、各種の国際大会から駅伝、強歩、幼稚園や隣組の運動会に至るまで「紀元二千六百年奉祝」のカンムリをつけて開催され健康報國を誓う。

奉祝を煽る新聞

こうした奉祝ムードを、新聞はただ報道するだけでなく、既に紹介してきたように、自らさまざまなイベントを主催し、その記事、写真を満載した紙面で読者の興奮を煽った。たとえば、中央紙である朝日新聞は元日の紙面に「紀元二千六百年・本社の新事業」を掲げる。

一、修練「権原道場」を奉獻

本社協賛提唱により、全国から奉仕団体数七一九七、

人員一二一万四〇八一名、寄金約一〇〇万円にのぼり

二月に奉献式挙行。

二、全国官国幣社に国運隆昌祈願

一一一社に本社代表が参拝、大眞榦マサカキ一対ずつ奉納。

三、奉納武道大会

権原神宮外苑道場で四月に主催。

四、日本体操大会

第六回大会を紀元二千六百年記念大会とし、権原を中心会場に、五月に全国一斉開催。後援、文部省、厚生省、全日本体操聯盟。

五、日本文化史展覧会

上野東京府美術館で五月に主催。

六、報道陣容を強化

事変報道体制の拡充、機械新設。

東京朝日新聞は、既に前年（一九三九）のうちに、東京市宮城外苑整備事業奉賛会に協力して「献木・献石運動を提唱」し、造成に勤労奉仕する一〇〇万人の肇國奉公隊について、しばしば記事を載せている。

また、家庭欄では「わが家の記念事業」を四〇〇字以内で募集中、わずか九日後の締切りまでに、二七七〇余通の応募があ

つたとして、一月一日から五回にわたって紹介している。

また、既述の教員の「聖地巡航」や「日本学生航空聯盟一千六百キロ飛行」を帝国飛行協会と共に催したことなど、元旦の新事業計画に数えていい企画も多い。

地方紙である信濃毎日新聞は、

- 一、信州二千六百年史編纂
- 二、汎信州歴史展覧会
- 三、県下著名神社歴拝聖火リレー
- 四、県下学童作品展覧会
- 五、善光寺忠靈殿体育大会
- 六、旭日礼拝の提唱
- 七、護国神社奉獻駅伝競争
- 八、歳末救済郷土演芸大会第三回
- 九、善光寺忠靈殿献木提唱

という、朝日の企画をそのまま一県単位にしたような事業計画をやはり元旦付紙面で発表している。「六、旭日礼拝の提唱」は、事変記念日である七月七日へ向けてのものだが、ただちに県以下の方団体をまきこんでいく。

新聞を見る限り、全国民が一年中を通して熱狂し続いているかの錯覚を起させかねないこれらのイベントは、新聞社が用紙削減、統廃合の圧力のなかで生き残るための企業努力ともい

える。

こうした新聞社の国策協力は軍部からも評価され、一九四〇年六月二十九日、全国三二社の新聞社代表が閑院宮参謀総長に召集され「御言葉」をたまわる。その一社となつた「信濃毎日」は感激、挙社一丸の言論報國を誓っている。

新聞紙面に大きなスペースを占める広告も、正月・紀元節・祝典の前後には、デパートの催しものから单一の商品、映画・演劇など興行案内から土地分譲広告まで、およそありとあらゆる業種の広告に「奉祝」の文字が躍る。

二、まつりと女

「二千六百年」に終始した一年、式典会場見物に、花電車に、提灯行列にくり出した人々の胸には、さぞや印象深く「紀元二千六百年」の意義が刻みこまれたであろう——。

けれども、本特集「その頃私は……」にも見られるように、「紀元二千六百年」の印象は驚くほど薄い。これは、その五年後の敗戦によつて、歴史書がマイナス評価しか与えなくなつたということによるのだろうか。だが、当時を体験した者にとって、あれほど国をあげての大キャンペーンが行われた祭の一年間の印象を、歴史書の記述によつて変えることができるだろうか。

この疑問を持つて、もう一度、体験者の手記・証言を読み直し、聞き直して行くと、そこには一九四〇年当時の年齢、立場による大きな差が見えてくる。

私は「二千六百年」に対する女たちの関わり方が、次の三通

りに大別できるように思う。

一は、学校教育の場で生徒としてあった立場

二は、何らかの組織に属していた立場

三は、個人としての、職業をもたない家庭婦人の立場

第一の生徒としての立場には、幼稚園から高等女学校、専門学校まで含まれる。

学校教育の対象として、この立場にあつた人々——子どもが最も大まじめに紀元二千六百年を信じこまされ、各種行事に動員されたことは、山中恒が既に述べているので参照していただきたい。

女学生が大いに動員された様子も、本特集の随所に読みとつていただけよう。

そして、生徒ではないが、全く一方的に「紀元二千六百年」を生涯にわたって負わされた人々——この年に生まれたばかりに「紀」の字を名つけられた人々をここに分類してよからう。

当時の新聞は「二六子」とか男の三つ児の「由紀一、由紀治

由紀彦」といった命名を報じている。

寿岳章子「日本人の名前」（大修館一九七九）は、この年生まれの「紀子」が、平凡であるがゆえに最も忌まれている名であることを記している。香川県、京都府の二つの公立高校の卒業生名簿を見ると、「紀」の字のつく名は一九四〇年生まれがその前後の年の十倍近い。

第一の、職場や婦人団体など、何らかの組織に属し、言いかえれば「家」の外に個人としての「仕事」をもつ女達。

愛国婦人会、国防婦人会、大日本聯合婦人会、女子青年団は全国大会を開き、各地区でも行事を行つたり、肇國奉仕隊に加わつたりする。「紀元二千六百年」奉祝の行事の合間には、慰問袋の発送や遺家族慰問、献金や兵士送迎、靖国神社大祭の手伝いといった銃後活動も行うのだから、幹部は文字通り東奔西走の日々である。隣組の仕事まで加わり、「活動家」は忙しい。

都会で農村で男に代る労力として期待される少女達は早婚を奨励されながら、

「戦争が十年つゞく」と思つて、女人人は「十年」身も心も若くして下さい。パピリオ（東京朝日新聞40・1・12）

と、化粧品の広告にまで叱咤され、デパートや工場などの職場ごとの婦人会員として記念行事に駆り出される。宮城外苑整備



『愛國婦人』(愛國婦人会機関誌)40年1月号より 紀元二千六百年式典のための
皇居前広場整備に出動した奉仕隊に対する愛國婦人会の活動を描いたもの。

宮城二重橋前の奉公隊 杉浦幸雄
 「御苦勞様、さあ／＼お茶を一杯」「いや、あなた方こそ、お茶を一杯」
 接待と言つてもかう廣くて大變ですね」
 一日四十名の東京部会員が交替に、数百名の殿方奉

の肇國奉仕隊にも、看護婦、産婆、女教員などの職種ごとの参加が行われる。宝塚の少女達は「すめらみくに」に出演のかたわら「白衣の天使」慰問に「紀元二千六百年」を歌い、女芸の師匠達は「紀元二千六百年いけばな展」に忙しい。

職業婦人の中でも、女教員は生徒を動員するだけでなく女子青年団の指導者としてもひときわ多忙である。

そして、自由業であるがゆえに最も体制の動向に敏感に反応するのが、文筆に携る一握りの有名女性である。

市川房枝の「婦選獲得同盟」は創立十五周年と紀元二千六百年を兼ねた記念事業として「婦人問題研究所」設立に動き、羽仁もと子は『婦人之友』一九四〇年一月号に「純粹武力純粹文力——二千六百年を謹み祝して——」と題し、平和のための軍拡は必要である、八絃一字という皇国の使命のため奮闘しようと呼びかける。

動員する側、される側いずれの女達も、「仕事」を持ち続けるため、すなわち、職場や団体に所属していることによって動員された。さらに、個人として奉祝の「仕事」をすることで「国民」であることを認められ、ひいては女性の地位向上につながると考えたのだろうか、男達以上に大まじめに奉祝したのである。

第三の、個人としての肩書も地位もない大多数の大人の女達三千六百万の女性人口の三八%を占める既婚の女性、妻・嫁・主婦・姑などと「家」に従属した名でしか呼ばれない家庭婦人にとって、「二千六百年」はどんな関わりがあったらうか。

宮城外苑の祝典に列席して感激を味わえるのは、皇族、大勲位以下昇殿者上位の者の夫人や、軍神の妹など遺族といった限られた少数の女性だけであって、

紀元二千六百年の式典に

召されたる夫は日々きほひをり

(石川たまき「アララギ」41・1)

と、夫や子どもの興奮に取り残される、無名の家庭婦人の姿を文字の記録から見出すのは難しい。

「紀元二千六百年」の記憶を問われた女達は、申合わせたようない「金鷄輝く日本の……」という歌を口ずさむ。そしてそれ以外の記憶はせいぜい花電車が出たこと、提灯行列があつたかどうか、といったものが多く、意外なほど地域差が乏しい。

女は家を守るものとの婦徳からすれば、都会に住んではいても、美術展や数々の展覧会・芸能祭の興行や発表会に、自分から進んで出かけた女は少ないに違いない。

宮城外苑の式殿拝観に、花電車見物に、そして山車見物などと練出した人波の中に、家庭婦人も多数いたことは事実であ

る。だがそれが子どものような奉祝の純粹な感激によるものかどうか。

東京の住民は正月のみならず何か事あれば全家外に出で遊び歩くものと見えたり。此れ近年の風俗なり。其原因は何なるや。地方人の移住するもの多きが故とのみ断定する事も亦当らざるが如し。

という永井荷風の四一年一月二日の觀察が示唆してくれよう。

この一年、ラジオは東亜新秩序建設、万邦無比の国体を宣伝し続け、奉祝曲を流し続けた。事あるごとに奉祝番組を特集して、家庭に「二千六百年」を送り込む。地久節には「婦人二千六百年」と題して日本女性の鑑十題（弟橘姫、防人の妻、紫式部、静御前、秀吉の妻、小野寺十内の妻、加賀の千代、野村望東尼、靖国神社に最初に祀られた女性）を放送する。

この「輝く年」に、ナショナルは「紀元二千六百年の記念品として……時局下に相應しく国家と家庭を結ぶラヂオをお備へ下さい」と国策型三九円の受信機を宣伝し、ラジオ加入数は單純平均すれば全世帯の三分の一に達しているが、農村への普及度は低い。多分、ラジオ以上に学校帰りの子ども達が通りすがりやゴムとびをしながら歌う奉祝歌が家庭婦人の耳に大きな音響効果をもたらしたのであろう。

この頃、何かにつけて、標語、短歌、体験談、小説、シナリ

オ、歌詞・曲が二〇〇円から一、〇〇〇円の懸賞つきで公募されている。朝日新聞の五〇周年記念現代小説は一万円の懸賞募集である。こうしたなかで、「紀元二千六百年」奉祝曲だけでも、紀元二千六百年奉祝会、日本放送協会、日本文化中央聯盟、日本国民禁酒同盟、日満中央協会などによって募集され、入選作はただちに各レコード会社によって競作発売され、映画化される。

公募マニアの中にはかなりの女性もいたことが推定される。「二万九〇〇〇余の中で入選した「興亜行進曲（今ぞ世紀の朝ぼらけ……）」は二三歳の療養中の高女教員、三九〇〇篇の中で入選した奉祝国民歌謡四篇はすべて女性の作である。こうしたことから、女性名をそのまま信じるのは危険だが、ある程度は、組織に属さず家庭責任も軽い女性の主体的参加があったと考えてよいだろう。

これらの応募のなかで、短歌については別格と考えられる。

本特集椿論文にもうかがわれるよう、短歌は女子教育において情操陶冶の手段として重視され、婦徳のなかでは唯一、女性に認められる表現手段として現在からは想像し難い地位を占めていた。

新年恒例の歌会始の題は紀元二千六百年を期して「迎年祈世」。皇族の歌二一首の内、一八首は皇太后以下女性のもの。さながら

ら女の世界である。三万五〇〇〇首の詠進のなかから選ばれた選歌五首は、女性と前線将兵が二首ずつを占める。

また、宮内省が二千六百年奉祝に募集し、編纂した『万民祝』の優秀歌一三首には五人の女性が選ばれている。

社会教育協会では、伊勢と権原へ奉獻する短歌二千六百首の応募資格を勤労女子青年に限っている。

しかし、文字で自己を表現し発表し得るのは、やはり女性のなかでは少数に過ぎないし、しかも、高等教育を受けければ受けたほど体制的思考を内面化させて、二千六百年をも額面通り奉祝するという傾向は、本特集に抄録した「紀元二千六百年奉祝歌集」にも顕著にうかがわれる。

おそらく、新聞さえ縁遠い家庭婦人の多くは、金鶏輝く日本の……を耳にしながら、家の中にあっては、「国策協力」に眞面目な夫を持った場合、そして、学校で日々、奉祝をたたきこまれる学齢期の子どもに突き上げられる形で、おカミの唱導する通りに家庭での遙拝や神社参拝、植樹といった奉祝行事を行つたのであろう。

そして、特に同じ町内に国策協力の「活動家」がいた場合などは、隣組を通じての運動会や会食、神社参拝、提灯行列などの奉祝行事に動員される形で、家の外に出たのではないだろうか。

の御馳走の才覚」を要求される、負担であると同時に腕の見せどころである。台所は女同士の秩序の確認の場なのである。

ところが農村恐慌以来、自力更生運動はこうした冠婚葬祭・贈答飲食に厳しい抑圧を加え、銃後運動がさらにそれを推進し始めた。

柳田国男の『分類祭祀習俗語彙』を見ると、まつりに成人の女が役を勤めるのはきわめて稀であることがわかる。女が主になるのは庚申講とかお日待といった飲食の会合が多い。

家庭婦人にとって、ハレの日とは、「何かしら変った食物」を準備し、共食に供する日であり、また晴れ着を家族に着せる日である。

瀬川清子が『日本人の衣食住』（河出書房一九六四）でも指摘しているように、

「おらが村では自慢じやないが 盆と正月米の飯

という唄もあるほど、ハレの日には米とその加工品（餅、団子、

赤飯、粥、強飯など）が期待される。ハレの食物として里芋を重視する民俗もある（坪井洋文『イモと日本人』未来社一九七九）が、支那事変以来の米の需要の激増と、それに対応する節米・統制の動きは、白米への根強いあこがれを裏づけていよう。

農耕儀礼を中心とする年中行事、冠婚葬祭や出征など、大きな折り目には酒宴と贈答がつきものであり、そこでは女達の役割は台所で燭をつけ料理を作ることである。とりわけ「主婦は次の収穫への食いつなぎに苦労しながらも、物日（もりび）（ハレの日）

さらに一九三九年から展開される節米運動は、「奉公供米」の名で農家の飯米まで奪い取り、減石と公定価格制度によって店頭から酒は消えていく。

四〇年の正月は、天皇も元日に前線料理を食べ、新年宴会や参賀者への酒肴を取止めて範を垂れてみせるなかで、国民は回礼を廃止せよ、贈答、飲酒を節制せよと指示される。

こうしたなかで『家の光』四〇年一月号は次のような「二千六百年の奉祝料理献立」を紹介している。

椀——皇紀二千六百年（大根・油揚・おだんご入りの味噌汁）
（大根と油揚の織切り、二纏二千、白いだんご六個を六

白II六百と見立てる）

口取——畠傍山きんとん（ほううれん草で色付けたじやが芋）、

金鴉芋（さつま芋）、日の丸羹（食紅と玉子の白味で紅白

色をつけた寒天）〔家庭では省く〕

お平——建国煮物（鏡大根、勾玉芋、剣午勞）〔三種の神器

を形どる〕

酢の物——紅白膾（大根、人参、塩鮭）

叢雲御飯——（小豆、うずら豆、または黒豆入りの強飯）〔小

豆〕〔皇統連綿、五穀豊饒、赤飯〕〔国民の赤誠を現わす〕

陸軍の糧友会食糧学校も、重箱をやめて一皿盛と七分搗き米の雑穀餅入りの雑煮を提唱する。

三種の神器に見立てた各種の奉祝献立は、日常食に推せんされている「一汁一菜ではなくて一汁または一菜」が既に「相当

広範な勤労国民層を包含するもの」（永野順造『綴方教室』の生活構造）一九三七）であり、雑穀の混食が農村での実態であつたことからすれば、十分にハレの御馳走らしく見える。

だが一般家庭はこれらの献立を祝うことができただろうか。

本特集加納論文による通り、統制の進むなかで、四〇年の正月

食品は白米禁止により飴色の餅しか許されず、塩鮭、新巻鱈が品薄と大陸行きの増加によって前年比五割高になつてゐるのをはじめとして、豆も田作りも蒲鉾も値上りしている。深刻な木炭不足に加えてガスにも節約令がしかれ、燃料難にも陥つてゐる。

十一月の奉祝会に供されたのは野戦料理の携帯食（圧搾口糧、乾燥肉、乾パンなど）の折詰、明治屋など食品会社の見本市さながらである。

一般家庭用には糯米が一世帯五合配給されるが、小豆が市場にないので赤飯はササゲの代用で間に合わせなければならない。

建国祭本部ですら「材料が手に入つたら紅白のお餅、建国団子、甘酒などを作つてお祝ひしませう。……お互に不自由は忍び合つて手に入る材料で……」と奨める状態であった。

国立栄養研究所の博士の献立に従つて隣組で祝賀会の共同炊事を行つた東京池袋の例は、口取り（かまぼこ、とろろ昆布、人参、ほううれん草）に牛肉入りの薩摩汁だけ、主食は持寄りである。

祝典の五日間、昼酒が許され、街頭には酔っぱらいが横行したが、東京でこの五日間に消費されたのは、事変前の「何でもない月の同期間の消費量とおつかつ」の上戸一人当たり一合五勺程度でしかなく一般家庭へはほとんど出回らなかつたと見られる。

ハレを形成する衣の面でも同様のことがいえよう。

綿服の結婚式が賞揚され、絹織物が抑制され、七・七禁令が発せられるなかで、「わかき男女身だしなみの悪くなりしこと著しく目立つやうになりぬ。東京從来の美風、小ぎれい、小ざ

所蔵會工商京東 催主
てに館西階五 てま日十三 りよ日二十二

紀元六千六百記念年会戦済展覽會

(会場) 東京本店 宮宣館 青空館 錦糸町 葛西町 竹工場 宝林園 葛西園 葛西大 藤森会・錦糸
市役所新館 東京本店 催主 青空海 延長
かきべす力揚に於て何如に美洋海のこ ★
かきべす化制時後に何如を好平常日 ★
見示屋を問ねる要緊の等

休日 毎月 月

標本 日 三 越

まで日十三 りよ日二十二
会場開幕 会場洋洋海 延長
東京本店 催主 青空海 延長
てに館西階四

第四回 海洋美術展覽會

が家大館の花道南画本日實洋
御用を出仕ある事と開業を(青空)

『東京朝日新聞』40年5月22日

つぱりしたる都會の風俗は、紀元二千六百年に至りて全くほろび失せたり」（永井荷風「断腸亭日乗」'40・3・3）。若い女教員も、寸法のキチンと合った服を着ていると子供たちに贅沢だと批判されるから、とわざと不恰好なスーツを着ている。女子青年団の紀元二千六百年奉祝大会もモンペ姿である。徴兵検査に行く青年にも羽織袴を着せることははばかられるようになつた。

虫干せる銀糸の羽織も十月より禁ぜられしと底にしまへり

（長尾信子「アララギ」'40・11）

と、女達は晴れ着の楽しみを抑圧されていく。

もちろん、まだ白米を食べていたとか晴れ着を着たという証言は聞かれるが、「ヤミ」につきまとうしろめたさはお祭り氣分とは縁遠いものである。

「紀元二千六百年」は、村落共同体の生活に根づいたまつりを抑圧しておいて、國家が設定したまつりを家庭ごとに質素に祝えと命じた。まつりにつきものの浪費、共食、贈答を禁じられたことは、まつりにおける女の役割を否定されたに等しい。家庭婦人にとって、ハレの二大要素である衣食を制約され、役割を奪われては、「二千六百年」はまつりではなく、見世物に過ぎなかつた。それが彼女達の、「二千六百年」の印象の薄い理由ではないだろうか。

むすび

「二千六百年」を追う内に、私は一九六八年の「明治百年」を思い出して調べてみた。

天皇の巡幸、恩赦、青年の船、公園や記念館の建造、植林、デパートの記念展から興行、出版、いけばな展まで、まつりの

仕掛けはそつくりミニ「二千六百年」だった。しかも「二千六百年」で中止されたオリンピックと万国博も実現されて、「明治百年」の繁栄を称えていた。その一方で、教育界、学界の反対は強く、マスコミは学園紛争の報道に忙しかった。国民の多くはシラけていたといってよいだろう。

豪華な「明治百年」のまつりが、さして一般の関心を惹かなかつたのに対し、質素な「紀元二千六百年」奉祝の、あらゆる領域の、あらゆる組織の便乗ぶり、山中恒のいう「見るもの聞くもの全てが△紀元二千六百年奉祝▽だった」という状況は予想以上のものだった。それを知るほどに、女達にこのまづりの印象が稀薄なことは不思議に思われてきた。

紀元二千六百年に当たるとされた一九四〇（昭和一五）年、この年は実は、明治国家体制の確立五十周年に当たっていた。

一八八九（明治二二）年から一八九〇年にかけて、大日本帝国憲法、金鷲勅章、教育勅語が制定発布されたのをはじめとして、内閣、裁判所、議会、地方、鎮守府などの制度が相次いで発足している。

為政者の真意は、実在の疑わしい神武天皇を讃仰することでなく、現体制の維持確認にあつたのだと思う。しかも、日清戦争以来、五〇年かけて築いてきた大陸での権益はまさに崩壊の危機に瀕し、「近代」は疑わしくなっている。体制にとって、

「めでたいが、お祭り騒ぎどころじゃない」年なのである。五年間の成果を維持するための「聖戦完遂」に、国民を奮い立たせる精神総動員の仕上げが必要だった。「近代」そのものの五〇よりは二千六百の方が神秘的でもっともらしい。まつりの体裁をとっても、国民に楽しませる余裕などなかつた。

それならば、経済、文化などあらゆる面で統制が強められるなかでの「便乗」奉祝とは何か。

もつとも固い商売といわれた米屋が廃業、満州移住に追われて行く姿は、およそあらゆる職業に携わる人々に明日の自分を考えさせたであろう。今までやつてきた「仕事」で明日もパンを得るためにには「バスに乗りおくれ」ではならない。政治家が「大政翼賛会」に馳せ参じたのと同じく、忠誠を示さなければ統廃合や失業の憂き日を見る。国家が「紀元二千六百年」奉祝というのなら、理屈はどうあれ「奉祝」に名をつらねるのが手っとり早い。

それは積極的に利益を求める便乗から消極的な踏み絵に至るまで、およそ「仕事」を続けて生きていくための哀しいまでのアガキである。その便乗が他者に及ぼす影響とか、責任といつた良心の問題は、パンの前には成立たなかつたとしか考えようがない。

パンのためにする「奉祝」に、男達は心から酔つてはいなか

つたのではなかろうか。

本稿で第二の立場に分類した、社会での「仕事」を持つている女が奉祝に走ったのは、男達の便乗の論理と同じものに動かされていたとみられる。しかもその上、彼女達は「仕事」を通じて「国民」としての存在を確認できる。男よりも熱心に自発的に奉祝しているのである。

第三の分類の家庭婦人が奉祝から取り残されたのは、本論で分析したように、それが見世物でしかなかったことによると加えて、個人として「仕事」を持っていなかつたことによるのではないだろうか。また、第一の分類の女生徒と同じく動員されるにはまだ隣組体制が機能をフルに發揮するほど充実していなかつともいえる。

現在、女たちはテレビという強大なマスメディアに取りまかれ、「生涯教育」の網の目に自ら組みこまれつつある。同時に

既婚女性の多くは雇用労働者であり、趣味活動に至るまでの多

様な「仕事」を持っている。「紀元二千六百年」に動員された比較的少数の女たちの条件は、現在では多数の女のものである。

「紀元二千六百年」を通じて、私達は、権力が「教育」によつて子どもを支配する恐ろしさを知るとともに、女が動員される危険性は、現在では一九四〇年当時と比べものにならないほど

増大していることを痛感したのである。

健民政策のかげで

(むらき数子)

東京市立の肢体不自由児学校、光明学校は一九三一年に設立された。「物にさえ廃物利用がある。まして人間を廃物にしておいてよいのか」この最も単純で素朴な理論が、猫の手でも欲しい軍部に受け容れられないはずはない。案の定、軍は光明の教育に関心を持ち、好意を示した。

光明の存在は、軍の医療関係者によって評価され、一九四一年には、五月に資材不足といいながら、第二期工事として特別教室、講堂、日光浴室、寄宿舎が増築された。十月には養護施設と養護指導に関する講習会が、文部省主催で開かれた。「もとより国民体位の低下が国家の問題となつたからで、ねらいは人的資源の確保にある。」

四二年世田谷区の管理に移された光明には、四三年にも学校農園などが造られ、治療室にはレントゲン、さらには堅牢な防空壕まで作られた。見学に来た国民学校の教師達は「すぐにこの子らを親元へ返し、この立派な施設をお国の役に立てたらどうです」と皮相的な感想を述べた。(松本保平「太平洋戦争と光明学校」『もつひとつの大太平洋戦争』より)